

# 『苔の衣』に見る「かぐや姫と八月十五日」というメタファー

片岡麻実

## 一、はじめに

「苔の衣」の引用は多彩であるが、その中でも「源氏物語」と「法華経」の引用という問題はこの作品の特質であり、それらを読み込む事によって作者の構想に奥深く入り込む事を可能にしている。「苔の衣」の研究史では従来、王朝物語との趣向の比較が主となっていたが、その中で今井源衛氏は「苔の衣」の構想論の先駆者であった。今井源衛氏は昭和二十九年に「日本文学」で発表した論文で、「年立・構造は矛盾しており、先行作品の切りつぎのみで成り立つ作品」および「年立の矛盾は作者のずさんさによる」という結論を示された。

小論筆者がこの主張について関心を抱くのは「年立の矛盾は作者のずさんさによる」という点で、物語の整合性を保てない程度の能力しかない作者がどうしてこの様な長編を執筆しえたのであろうか。確かに年立の矛盾は著しいが問題はその様な所にあるのではない。「現象を数値化して示す」という実証性は物語研究に欠かせない要素であるが、それだけでは物語の側面を明らかにしたにすぎない

のである。「作者のずさんさ」でこの作品を片付けてしまうのではなく、作者がどの様な認識・必然性をもって「年立・構造の矛盾」をはらんだ物語を執筆したのか、という点は謙虚に検討されるべきであろう。本稿は作品の核となっている「月の都」の話型と物語の関係を指摘するものである。なお、「苔の衣」のテキストとして、一九九六年に発行された今井源衛・校訂訳注『苔の衣』笠間書院・刊を使用した。

## 二、『寝覚物語』と月の都

さて、「苔の衣」冒頭の

逢うての恋も逢はぬ嘆きも、人の世にはさまざま多かる中に、  
苔の衣の御仲らひばかり飽かぬ別れまで例なくあはれなること  
はなかりけり。(注1)

は、『後撰集』や『大和物語』に見える小野小町と僧正遍照の贈答歌を基に描写された(注2)。そして、この一文は「夜の寝覚」の冒頭人の世のさまざまなるを見聞きつもるに、なほ寝覚の御ながらひばかり、浅からぬ契りながら、よに心尽くしなる例はありが

たくもありけるかな(注3)

を模したものである事が、辛島正雄氏によって指摘されている(注4)。

「苔の衣」の主要場面に多数「月の都」というモチーフが描かれる、これは「夜の寝覚」にも共通する趣向である。また夢によって運命が予告され、それに逆らう事ができないという「宿世の予告」も「寝覚物語」の核となる趣向であり、「苔の衣」作者が夢告にこだわった理由がここから見出せる。作者の創作は「寝覚」をヒントに行われた面もあったのだ。

さらに苔の衣の大将が恋焦がれた西院の姫君は石山の申し子であるけれど、石山は、寝覚の上の生の舞台であり娘の出産もそこで行われたという重要な地。石山は昔から月の名所として歌枕となり、都でも人や待つらん石山の峰に残れる秋のよの月(注5)と詠まれるなど、月と切り離せない地であった。

「寝覚物語」は巻初において天人による運命予告が行われる。そして宿世の予告に従わざるを得ないヒロインは、重要場面において常に月と伴に描かれる。女君の悲しい定めが即ち月なのだ。

一方「苔の衣」においても西院の姫君の誕生祈願が石山で行われ、母・西院の上は「二葉よりことなる花は得たりとも盛り春は見もし果てじを」と夢告を受ける。そしてその夢告通り女系三代による、権力と恋愛が複雑に絡んだ悲劇が展開されていく。物語の冒頭において、「寝覚物語」の構造は非常に重大な位置を示しているのだ。

おそらく当初作者は、「寝覚物語」に発想を得て作品執筆を始め

た事は間違いない。しかし書き進めていくうちに、「寝覚物語」に内包された「月の都」という話型に揺り動かされ、独自の物語へ推移していったのではないか。そこで本稿では、月の描写という点から、「苔の衣」を捉えてみたい。そして、王朝物語に脈々と流れる月の都という素材を、作者が如何に料理していったのか考えていきたいと思う。

### 三、春の巻における月

さて、「苔の衣」における月の描写は各巻にはほぼ均等に分配されている。ということは作者が執筆当初から「月」を意識して物語を書いていたことが読み取れるであろう。また「月の都」もしくは「かぐや姫」と直接的に表現された箇所は少ないが、八月十日余り、即ち八月十五夜という描写の多さが目を引く。次に、苔の衣の大将の姉・中宮の妊娠発覚および出産場面を挙げる

①八月にもなりぬ。(中略)十日のほどにぞ気色あれば、宮々の使ひ、内裏・春宮のはらさにも言はず馬・車のおとおどろおどろしき間で行き交ふ。(注6、傍線片岡)

②八月十日余日中宮御気色あれば、内裏・春宮の御使雨の脚よりけに茂きを、「めでたき御幸ひ」と世人言ひ思へり。(注7、傍線片岡)

中宮が皇子を生む事によって帝の寵愛はますます増し、苔の衣の大将をはじめとする関白家の繁栄は約束されたも同然。しかし一家が権力を得た日にちが、八月の十五夜前後というのは非常に意味深

長である。なぜならば、『源氏物語』における女性の主要人物は秋、特に八月十五日前後に死亡するという類型的叙述が為されているからだ。

『源氏』の場合、「満月の晩に死ぬ」というのは、無常の人生の推移を十五夜の名月と対比させて暗示するためという可能性もあるし、月を盞的なものと見る民間信仰の反映とも考えうる。満月に近い十五夜の前後は古い人の祖盞を迎え祭る日で、神や人の魂が月と現世を行き来するという信仰があった。そのため王朝物語が書かれた当時、月は「竹取物語」にもみられるように畏怖して忌み嫌う傾向があった訳だ(注8)。

そのような不吉な感覚を伴う八月十五夜に姉・中宮が妊娠するというのは、関白家のその後の不幸を予告しているのではなからうか。皇子が東宮になることによって一家は権力を手にする事ができる。しかしその権力によって、それぞれの人生は翻弄され罪ぶかさにまみれていったのも事実である。

また、たまたまの偶然といえるかもしれないが、中納言即ち若の衣の大將が西院の姫君を見初めたのも、八月十日余りの月が照っている月夜であった。

③八月十日余りの月つねよりも隈なくさし出でたるに、例の思しあくがれて、内の大臣の宰相いざなひものせんとて、忍びて西院へ渡りたれば、(中略)人声あまたにして、琴・琵琶いづれとなくをかしく弾きあはせたる中に、琴の音は優れて雲居に澄み上りて、月の都の人も聞き驚くらんかしと聞こゆるに、(注9、

#### 傍線片岡)

若の衣の大將は友人に会いに来た際に妹君・西院の姫君が琴を弾く場面を垣間見、彼女を「月の都の人も驚くほどの腕前」と評す。

主人公の楽器演奏の妙音が天空まで登り奇瑞を招くというのは、王朝物語に多々みられる趣向であり、「寝覚物語」や「狭衣物語」、「とりかへばや物語」『有明けの別れ』等がその例に挙げられる。これは天人降下のモチーフを踏まえており、場面的にはその人物の類希なる才能明示、さらには謎めいた運命の予告にもなっている。楽器と月の都の関係は非常に深いのだ。

ただし女性が妙音を轟かせるというのは、「とりかへばや物語」で男装の女君が笛を奏するのを例外とすれば、管見において「寝覚物語」以外に例を見ない。女性が楽器を演奏して奇瑞が起こるといふ箇所は非常に注目すべき内容なのだ。ある意味、西院の姫君は男性性・ヒーロー的要素を持っているのかもしれない。彼女が本当にヒーロー的なのかどうかは別にしても、このような点からも「若の衣」の構造に「寝覚」が深く食い込んでいる事がわかる。

#### 四、物語の時空と月の都——『狭衣物語』との比較——

前節では春の巻の十五夜が主人公の運命予告と深く関わっている事、そして「寝覚物語」が如何に「若の衣」の作者に執筆のモチベーションもしくはイマジネーションを与えたかを述べた。また、冒頭に語られたように、愛しながら別れなくてはならない運命の二人の出会いが十五夜であった事、ヒロインが女人でありながら奇瑞

を起こしうるヒーロー性を持った存在ではないか、という見解を示した。

夏の巻においても月の描写は三例見られ、どれも物語上重要な鍵を握る場面である。

④「いとかばかりなるはいまだ見ずかし。朱雀院の一品の宮の御手こそなべてならずと思ひ染みたれど、これはいまひとしほ様殊に見ゆるは珍しきにや。いかにかくしもよろづに優れ給へるぞ」と、うちも置かれずまぼられ給ふに、ありし月影の様・容貌にては、まことにかくてこそはと思さるる。(注10、傍線片岡)

西院の姫君を見初めた苔の衣の大将は、彼女を「ありし月影の様・容貌にては」と回想する。「月影」という表現は美的な印象も与えるけれど、月光は当時の人間にとって畏怖すべきもの。罪とその贖罪の為に地上に現れたかぐや姫を連想させる。月影は中世において明るい印象を与えない表現なのだ。

そして「寝覚物語」のヒロインが禁じられた恋の発覚により心を痛める場面においても、「ありしにもあらず憂き世に住む月の影こそ見しにかはらざりけり」と描写されており(注11)、またしても「寝覚物語」の影響力の強さが浮かび上がる。悲劇的人生を送った寝覚の上のヒロイン像は西院の姫君に色濃く投影されているのだ。またそのことから、西院の姫君の今後が決して安穩としたものではない事を読者に喚起するのである。

①でも解説した通り、八月の十五夜は「源氏」のヒロイン達が死に、さらに当時の人間にとって「神や人の魂がさまよう畏怖すべき

日にち」であった。その日に皇子が生まれるというのは明らかに不吉な出来事であろう。この皇子によって苔の衣の大将の家は繁栄するけれども、逆に権力に縛られてそれぞれは自由を失う。物語が悲劇へ向かうその序章を暗にこの出産が物語つていると考えられよう。

⑤更け行くままに笛の音澄み上りて、狭衣の大将の、「光にゆかん天の原」と吹き澄まし給ひけん笛の音も、これには及ばじや、まことに月の都の人待たるる心地する。(注12、傍線片岡)

西院の姫君と結婚した苔の衣の大将は恋煩いから開放され全快する。そして殿上の管絃で笛を吹く姿が狭衣の大将に響えられる。人物造型のモデルと思われる狭衣の大将は楽の才能によって天人降下という奇瑞をおこし月の都へ誘われるも、しかし天上に戻ることなく恋と罪の渦巻く地上で生きていく。「寝覚」同様に「狭衣」も「月の都」を内包している事にここで注意しておきたい。

「狭衣」における「月の都」には二種類ある。第一に昇天と引き換えに「法華経」を修行する事によって自力往生で行く事ができる兜卒天。第二に帝の申し出による、女二宮との結婚によって生じる雲居の上の世界での栄華。即ち帝位に就く事で権力を掌握するということだ。源氏の宮への恋は仏道に入り兜卒天へ昇天する事を促しつつも、その愛着ゆえに飛鳥井の女君をも愛してしまい、現世から逃れる事はできない。

そうすると彼に残されたのは帝位という名の「月の都」だが、「竹取物語」では帝位は人の世界のもの、「月の都」は天人の世界と二項対立しており、本来「帝位」即ち「月の都」という図式は成り

立たない。しかも「狭衣」は「法華經」引用によって「この世は悪世としており、地上の世界に在る限り救いはない」という構造を浮かび上がらせる。そして死してなお子供への思いを断ちきれず夢に現れる飛鳥井の女君はあくまでも親子の愛執につながれた罪深い魂と述べられるのだ(注13)。

現世を離れてなお子供または家族への愛着を断てないという点では、住吉の姫君や西院の姫君、苔の衣の大将の姿と相通じる。また飛鳥井の兄の僧は阿私仙と呼ばれ「法華經」の提婆達多品に比されているが、狭衣の出家を阻む役割を果たし、苔の衣の大将の出家の状況とは対極の構造。その事が逆説的に、「苔の衣」作者がいかに「狭衣」を意識していたかを説明しているのだ。

「狭衣」における「月の都」は破綻をきたし、狭衣の大将は帝位という権力を得てもその愛は満たされることなく物語は幕を閉じる。現世に在る限り彼は愛欲という名の罪にまみれつづけるのであるから、当然救いを得る事もできない。従って彼が贖罪できるはずもなく、物語の人々は救われぬという結果を招く。

しかし「苔の衣」においては主人公が皇女の降嫁を拒んで出家し、雲居の上の人間となる事を放棄した結果、月の都の語型は破綻を起こすことなく物語を支配しつづける。よって苔の衣の大将が出家した際に阿私仙は「法華經」通り「仏道へ導く者」として役割を果たすし、苔の衣の大将は入道として身を変えた後に娘を祈祷で救うことができたのだ。ある意味彼は「狭衣」には無かった救いの可能性を体現する事ができたのかもしれない。「苔の衣」作者が「狭衣」

に発想を得ている事は間違いないのだが、新たな救いの次元を用意し、物語を思想的なものへ高めているとも評価できよう。

## 五、かぐや姫になれなかつた女君、弘徽殿の姫君の物語

秋の巻はかぐや姫もしくは十五夜に関連する描写が二箇所ある。

⑥この御気色を見給ふに、いみじからんかぐや姫なりとも何かはせんとぞ思さるる。(注14、傍線片岡)

西院の姫君は、夫・苔の衣の大将に弘徽殿の姫君降嫁の話が持ち上がっている事を知り発病する。しかし大将は、たとえかぐや姫であろうとも西院の姫君にはかなわないと考える。つまり西院の姫君はかぐや姫に比される存在なのだ。そしてそう考える大将自身も、実はかぐや姫の語型を踏まえた狭衣の大将に比される存在であり、両者は相通じるものを持つ。

⑦八月十五夜に殿上の御遊びありて、いたく内裏より召しあれば大将参り給ぬ。あさましう参り給ふことの難きをぞ帝も本意なしと思したるに、今宵は待ちばせたまひて、月の光よりもめづらしう思したるぞいとかたじけなき。(注15、傍線片岡)

この管絃の遊びの時に苔の衣の大将は弘徽殿の姫君を垣間見るが、その姿が彼の心を捉える事はない。八月十五夜に西院の姫君を垣間見た状況がここに再現されている訳だが、結果は全く異なるものとなった。彼は「名月の光よりも」と喩えられる存在で、シチュエーションも管絃の遊びであるから、狭衣的天人降下が起こってもお

しくはない。だが、何も奇瑞は起こらないまま作者は次の場面の描写へ移る。

先ほど「かぐや姫でも西院の姫君には適わない」と大将が発言した事を紹介したが、ここで弘徽殿の姫君はかぐや姫になり得ない程度の存在という事実が顕現されるのだ。彼女はあくまでもヒロインとはなり得ず、ヒロインやヒーローを追いつめるだけの罪深い存在。彼女自身が罪深いことをしている訳ではないのだが、権力の側の人間は帝を始めとして、あくまでも人を不幸に陥れる存在としてしか描かれない。

しかし女性の登場人物で正式に出家を果たしたのは弘徽殿の姫君のみ。尼となった彼女は病氣も全快し、晴れて仏道に専念することができた。彼女は昔の衣の大将の出家を決断させる為だけに登場させられた人物であったが、唯一救いを得た希有な存在でもある。

一方、物語のヒロインとして扱われた女性たちは、出家を願いなから果たせぬままあえなく早世する。唯一、出家を果たしたかに見える住吉の姫君も僧による正式な出家ではなく、しかも尼となつても悟りきれない彼女のもとへ救いは訪れない。

この物語は「果たして女性が救いを得ることができるのか」というのが作者の主眼と見えるが、かぐや姫に匹敵するヒロインは救いをえられないまま贖罪をし続け、唯一かぐや姫になれなかった弘徽殿の姫君のみが悟りの道を開きえたパラドックス。これは一体、何を意味しているのか。

かぐや姫は月世界で罪を犯し、それを贖う為に人間世界に転生し

てきた。そして罪を浄化した彼女は婚姻することなく月世界へ、天人の身に交じて帰還する。本来ならばかぐや姫たるヒロインが救われても良いはずなのに、何故弘徽殿の姫君のみが救済を得られたのか。彼女は主人公によってヒロインとして認識されなかった。しかし彼女の物語におけるプロセスを考えてみれば、実にかぐや姫たる資格を持ちうる。

弘徽殿の姫君は結婚話によって、内裏即ち「雲居の上の世界」から昔の衣の大将達が存在する「地上の世界」へ降りてくることになる。しかし己の罪深さゆえに結婚相手を失踪させ、結果的にはかぐや姫の如く結婚を拒否したことに同じ結果になる。本来雲居の上の住人である彼女は愛欲の罪にまみれた地上にいるべき存在ではない。そのため彼女は出家して現世を離れ、再び仏達にいる天上世界へ往生しうる存在へ変化する。

こうして構造を分析してみると、彼女の生涯は即ち「竹取物語」の展開と実に良く通じ合っている事がわかる。

というのは、かぐや姫は物語において「人間世界」へ仲間として加わる時に天人から人へ姿を変え、そして帝の求婚を拒否する時は隠れ身で姿を消し、再び月の都へ帰還する時は天人の姿へ転じるというように、三回の変化を遂げているからだ。

かぐや姫は異界の人間であるが故に、人間界で生きるためには変化しなければならぬ。従って変化できぬものはかぐや姫になりえないのだ。「天上から地上に降りる」という行為、そして「身を変え」という行為がかぐや姫には必要なのである。つまり「月の都」

の話型に従えば、脇役たる弘徽殿の姫君こそかくや姫だった訳だ。だからこそ彼女は唯一現世から身を逃れ、救済を得るべく仏道へ入ることができたのである。

こうして弘徽殿の姫君の物語を考察してみると、作者は実によく月の都の話型を消化して物語を執筆していることがわかる。「苔の衣」作者は構造がずさんである」と今井氏によって批判されたが、拙論によって年立の矛盾を抱えつつも、細かい所まで話型を大事にして執筆していることが実証できたのではなからうか。また「狭衣物語」を踏まえつつも「月の都」の結末は正反対のものであることも興味深いと言えよう。

「狭衣」では「月の都の話型」が破綻し登場人物は救済を得ることなく物語が終わってしまった。だが「苔の衣」では主人公が権力を放棄し、修行に専念するという行為によって話形の破綻を防ぎ、中宮への救いの可能性を残すのである。これはあくまでも私の見解であるが、「女は仏道によって救われうる」という主張を、「苔の衣」作者は物語ることによって暗に行っているのではないか、と考えさせられるのだ。

## 六、「死」と月光

物語のラストを飾る冬の巻には今までの巻よりも多少多い四例がある。しかし描写される場面は「永遠の別れ」「死」であり、今までの用例と異質である。例えば住吉の姫君が兵部卿宮に内緒で住吉へ逃げようと準備している場面にそれが見られる。

⑧、八月十日余りのころに迎え奉るべきよしなど言ひたるに、なにとなく乱れまさる。(注16、傍線片岡)

住吉から迎えが来るというのは本来喜ばしいことであるはずのだが、迎えが来るのが八月十日過ぎという点は非常に不吉である。なぜなら、「源氏物語」のヒロインたちが亡くなるのも八月十五日前後だからだ。現在の不幸を避けるために流離するにもかかわらず、住吉から迎えがヒロインの死のイメージを連想させる八月十五夜。読者に姫の未来が明るくないことを想像させる。そして、実際に彼女は住吉の地ではかなく亡くなるという結末を迎えるのだ。つまり、「八月十日余り」という月日が彼女の未来予告となっているのである。

「八月十日余り」という日には重要場面ではしばしば現れる。そして苔の衣の大將が西院の姫君を見初める場面など、物語の核となるシチュエーションで登場することを見逃してはならない。というのは、今までの用例では月の描写が一見明るい未来を予告させるような状況で使われたけれども、それらの場面は結果的に将来の不幸を招く要因となっているからだ。ある意味月は運命を予告しているといえよう。月は美的描写でありつつ、物語においては不幸の象徴でもあるのだ。

そして八月十日余りの月の下で住吉の姫君は兵部卿宮と再会する。  
⑨、十日余りの月華やかにさし出でたれば、(中略)やがて端つ方に臥し給へる月影の常よりも愛敬づきなまめかしく見え給ふを、「他所にてだにも今はいつかは見奉るべき。さすがに世の慎ましきばかりに引かれて、かくとだに言ひ知らせ奉らで、行

方なくいたづらになりはてぬるべきにこそ」と思すに、(注17、傍線片岡)

月光の光を浴びた兵部卿官はいつもにまして魅力的で優美である。だが、この物語において月光は不吉なものを象徴し、予告する。しかも二人の永久の別れとなるこの場面は八月十日余り。読者は不吉な未来を予測せざるを得ない。住吉の姫君の立場で考えると、姫の流離が不幸な結末を招くから、この場面が月で彩られると考えることもできる。しかし本当に月が運命予告しているのは兵部卿官の方なのである。

⑩春宮の御方に八月十五夜の宴させ給ふに、宮誘ひきこえ給ふ。

御心地すこし暇あるやうに思さるればわりなくためらひつつ参り給へるを、中宮も嬉しく思したり。(中略)御簾の中に見給はむ御有様も推し量られて、掻い弾き給ふ撥音はまことに珍しく飽く世あるまじくぞ思さるる。(中略)何事もただ今宵に限りつる心地して心細く思さるるままに、

命絶え我が身尽きなばあはれとも今宵の月を形見とや見ん

(注18、傍線片岡)

兵部卿官は病を押して八月十五夜の宴で楽器を演奏する。彼の月の下での楽器演奏は非常に素晴らしいものであるが、天人降下や奇瑞は起こらない。彼には狭衣の大將や昔の衣の大將の如くにヒーローたる度量がないのである。そして彼は不吉にも「今宵の月を私の形見に」と死を予告する歌を詠む。物語の冒頭において歌が運命予告となっていたが、彼の場合においても歌の予告からは逃れられず、

死を迎えるのだ。この晩の月は八月十五夜、あきらかに死のイメージが内包されている。

④でも述べたが、西院の姫君が「月影の女性」と表されているのは、「寝覚物語」の不幸の象徴としてのチーム、「月の影」が利用されている。そして偶然にも⑨では兵部卿官が「月影の常よりも」と譬えられ、若くして死亡する。彼は男性でありながら明らかに早世のヒロイン像が重ね合わされているのだ。本来ならば女系三代の末裔、昔の衣の中宮や住吉の姫君がかぐや姫に比されてもよいはずなのであるが、冬の巻において月と伴に表現されるのは本来ヒーローになるべき兵部卿官である。これは一体何を意味しているのだろうか。そして彼が亡くなって約一年後、再び八月の十五夜がやってくるのだが、またしても事件が生じる。

⑪八月十五夜限なきにも、兵部卿官の「今宵の月を」とのたまひしことを思しめし出でて、上は人知れずしほたれさせ給ふ。

(中略)御果てにもなりぬれば、院・母宮などは異事なく思し

営むにつけても、御涙止め難げなり。九月ばかりより中宮も物の怪だちてわづわらせ給ふ。(注19、傍線片岡)

兵部卿官がなくなつて一周忌が来た。奇しくも八月十五夜の月が照り渡り、彼の辞世の歌がみな頭をよぎる。そして九月になると昔の衣の中宮は突然病に倒れる。しかも物の怪に憑かれるのだ。彼女に誰が取りついたのでか、登場人物は誰も気がつかない。だが読者には「照り渡る月光」と「今宵の月を」というイメージから、もしや兵部卿官ではないかと推測させられる。そして實際昔の衣の入道

が折禱を行うと臨終に瀕した彼女のもたら彼の姿が現れるのだ。

六条御息所のように「嫉妬によって女性にとりつく」という話はないわけではないけれど、私見では、ヒロインに取りつく男主人公という設定は、王朝物語においてかなり異例のことであると思う。

それでは作者があえてそのような設定をお膳立てしたことに何か意義があるのであろうか。ヒントはおそらく「月影」が握っていると考えられる。

### 七、本当のかぐや姫は…

彼は男性にもかかわらず月の光を浴びた「かぐや姫の如き人間」として描かれる。しかし、主人公にもかかわらず英雄として奇瑞を起すことはできないし、権力を握ることもない。現世での罪にまみれて死すのみなのだ。彼はこの世で救いを得ることなく、ただ運命に流され続ける。これは苔の衣の中宮や住吉の姫君は自分の意志で兵部卿官を拒み、一人苦しみに耐えて生きていこうとする態度と対照的である。

彼の生涯を振り返ってみると、本来は東宮の弟宮であり雲居の上の人間である。しかし苔の衣の中宮へ愛執をもちながら住吉の姫君への愛着も捨て切れず、かつ現世の愛執に搦め取られる。しかも優柔不断な彼に見切りをつけた住吉の姫君は去ってしまい、そして東宮の妻である中宮との恋も成就しない。彼は密通という罪を抱え続け、ついには月によって死へ導かれるのである。狭衣の大将の如く「本命と結ばれないがゆえに何人も愛さないではいられない」とい

う状況に陥り、結果的に破滅を招く。彼は地上に想いを残しているから、死してなお成仏することができない。

⑩女院ばかりおはしますに、さし寄り給ひて、「この世にはさすがに深き契りにて逢うはで別れしことのかなしき思はずなる心の程を、身を変へて後終にかくと知られ奉りぬるこそ方々心憂く、先立ち奉りし罪にいとどやるかたなかりしもの思ひさし添へて、いとくるしく」とのたまふ気色たゆげさなど、(注20、傍

線片岡)

というように兵部卿官は「変化した身」で母の前に現れ、親不孝と愛執に苦しむ自分のことを語る。「誰かにとり憑く」という趣向は、「寝覚物語」で「女一宮に寝覚めの上の生き霊がとりついたという噂が広まりヒロインが苦悩する」という前例がある。しかし昔見ではヒーローが女性にとりつくという例を見たことがない。

男主人公がなぜ女性にとりつかねばならなかったのか。それでは彼が現れる主要場面では必ずといっていいほど描かれる月光と彼の生涯を思い起こしてみたい。

雲居の上の人間であった彼は愛執によって地上の罪にまみれ、さらには住吉の姫君によって婚姻拒否をされる。その後、愛執に苦しみ抜いた彼は病によって死亡し、死後「死霊」という姿に身を変えて再びこの世にあられる。そして彼は苔の衣の入道によって折禱され、霊は天上の世界へ成仏していくのだ。

このパターンは、拙論第三節で叙述した弘徽殿の姫君とかぐや姫の話型にあてはまるのではなからうか。天上世界から地上に下り、

罪を経験する。そして結婚拒否を経験したあと、再び身を変じて天上世界へ戻る。つまり兵部卿官も第二のかぐや姫だったのだ。そのために重要場面では月光と伴に描写され、寢覚の上の如く霊として姫君にとり憑く趣向が取り入れられたのではないか。そう考えれば彼に早世のヒロイン像が重ね合わせられるのはむしろ当然のことと言えよう。

寢覚の上は救われないままに物語から去っていくが、兵部卿官は調服されることによって救いを得、成仏していく。かぐや姫の如く天上世界へ帰っていくのである。「苔の衣」は一見誰も救われない世界に見えるが、弘徽殿の姫君や兵部卿官の如く正當なかぐや姫の末裔は救済を得ることができる。また作者が男性にかぐや姫像を投影した点はこの物語の特質と言えよう。男性が女性に譬えられる点は気になるところであるが、しかし、仏教にすがって女性が変成男子を希求していたことを考えれば、決して奇妙なことでもない。「とりかへばや物語」や「有明けの別れ」の如く、異装の物語が執筆されたことを考えればごく自然な流れと言えよう。非常に鎌倉時代的な要素なのである。

また、ヒロインたる女系三代は救いを得られないまま運命に翻弄される。仏道に専念できた人間は救いを得られるけれど、現世で権力にかかわる人間には救いは訪れず贖罪し続けなければならぬ、作者はそう語っているが如くである。

月の都の話を取り入れることで作者は罪と救済の問題について物語った。そして今回は割愛したが、この物語は多数の「法華経」

引用がなされており、「苔の衣」作者が「女性と罪」という問題を意識して執筆したとおぼしい。作者は「果たして女性は救われうるのか」、とたびたび問題提起するが、その答えは最後まで明かされない。この答えのない問いかけこそ作者の執筆のモチベーションであり、「法華経」が内包する女人蔑視思想を再構築しうる可能性を物語はもちえたではなからうか。

## 八、結び

この作品の研究を概観してみると、第一に「源氏物語」を模倣した物語で「親子の恩愛」が主題であるとすると、第二に今井源衛氏による「年立て・構造は矛盾しており、先行作品の切りつぎで成り立つ作品」という評価、第三にニューヒストリズムの影響を受けた「家系」というアプローチで分析したものの三傾向が見うけられる。

そこで拙論では月の都という話型を元に王朝物語における多作品との相違を考察し、「源氏」の亜流という呪縛から「苔の衣」をはじめとする鎌倉時代物語を解放するためのささやかな抵抗を試みた。さて、「寢覚物語」の趣向は物語執筆当初において「苔の衣」の核になるほど大きな影響力を持っていた。そして「狭衣物語」においても「苔の衣」の如く「月の都」というチームが登場するが、帝位と仏教という相反するものが「月の都」として同時に存在するため、この話型は破綻する。しかし「苔の衣」の主人公・苔の衣の大將は帝位を放棄した故に話型の破綻をおこさず、娘へ「救済の可能

性」を示して物語の幕引きをすることができた。

また脇役・弘徽殿の姫君は「かぐや姫たりえない女性」と評されているが、意外にもかぐや姫の話型にそって造形された人物であり、かぐや姫の如く「身を変える」ことによって唯一出家・救済を得ることができた。

さらに物語り後半の主人公、兵部卿官も月光に替えられる存在であり、彼の「生涯」及び「死霊となること」はかぐや姫の話型に沿った展開であることが明らかになった。そして男性が女性に例えられ、というのは一見珍しい設定のように見られるが、鎌倉時代物語において「入れ替わり」・「異装」の物語が執筆されていたことを考えれば、自然な流れであることを述べた。

なお拙論では割愛したが、作品冒頭・春の巻では「寢覚物語」の趣向を元に執筆されたとおぼしい。というのは春の巻には未来予告等、「寢覚」の影響が認められるのに対して、「苔の衣」という作品の芯となる「罪深し」および「法華経」の用例が一例しか登場しないからだ。また、その「法華経」の一例も「寢覚」を意識して物語の展開を予告するために引用された感が拭えない。執筆当初の作者はこの作品のオリジナリティをそれほど意識していなかったことがここから読みとれる。

しかし「寢覚」に内包された月の都の話型などを消化していくことによって、「苔の衣」という作品の独自性が生まれていく。今井源衛氏は「年立ての矛盾は作者の能力のなさ」と判断しているが、私見では、「当初『寢覚物語』『源氏物語』等の模倣から『苔の衣』

の執筆が始まったが、執筆途中で他作品の模倣から離れ、核となる構想を構築した。また年立ての矛盾は月の都や如意宝の話型に従ったため生じた破綻であり、作者の意図的なものであった。よってこれは単なる構想の破綻ではない」、というのが拙論での結論である。

### 【注】

- 1、今井源衛・校訂訳注「中世王朝物語全集7 苔の衣」笠間書院、p、8より引用。
- 2、前掲書p、63参照。
- 3、鈴木一雄・訳編「新編 日本古典文学全集28 夜の寢覚」小学館、1996年第一版、p、15より引用。
- 4、今井源衛・校訂訳注「中世王朝物語全集7 苔の衣」笠間書院、p、323参照。
- 5、「新古今集」一五二四・藤原長能  
石山にまうで待りて、月を見てよみ待りける  
都にも人や待つらん石山の峰に残れる秋のよの月  
を一例としてあげた。
- 6、今井源衛・校訂訳注「中世王朝物語全集7 苔の衣」笠間書院、p、40、41より引用。
- 7、前掲書、p、82より引用。
- 8、神谷吉行「日本伝承文学の研究」おうふう、平成七年初版、p、383、409参照。
- 9、前掲書p、56、57より引用。
- 10、前掲書p、79より引用。
- 11、雨宮隆雄「夜の寢覚」の構想と作者について―「月の都」の天人降下の設定意義を巡って―（日本文学研究資料刊行会・編「平安朝文学」一有精堂、昭和55年発行所収。p、268参照。）
- 12、前掲書p、97より引用。

13、鈴木泰恵「狭衣物語」と「法華経」——かぐや姫の月の都を巡って」  
（『国文学解釈と鑑賞 平安文学と法華経』平成8年12月号、至文  
堂刊、参照。）

- 14、前掲書P、140より引用。
- 15、前掲書P、147より引用。
- 16、前掲書P、236より引用。
- 17、前掲書P、240、241より引用。
- 18、前掲書P、257、279より引用。
- 19、前掲書P、272より引用。
- 20、前掲書P、276より引用。